

二
比
島
方
面
部
隊

-199-

0196

第二十六師団司令部 (泉第五三一部隊)

年 月 日	略 歴
昭和二 九 三〇	第二十六師団司令部編成(名古屋) 爾後北支大同に駐屯
一九 七 一	大陸令第 号により第十四方面軍の戦闘序列に入らしめる
七 一 一	編成改正完結
七 二 三	南方派遣のため駐屯地大同出発
七 二 七	滿支国境通過
八 五	釜山港出帆
八 二 三	比島ルソン島マニラ上陸、サンフェルナンド及タルラック附近の整備に任ず
一 一 八	転進のためマニラ出発
一 一 二	レイテ島オルモック上陸
一 二 七	米軍オルモックに上陸

8010

-201-

0197

二二	二五	我軍はタリサヤンに兵力を集結
一〇	二〇	パレンシヤ飛行場戦闘に於て約五割の損害を受け
六	三〇	カルブコス、カナンガ両地区の戦闘に於て全滅
八	一五	停戦
九	二	終戦

戦傷者又は少数の生存者は米軍の收容所に收容され終戦後米軍收容所より各個に復員す。

工兵第二十六連隊 (泉第五三一九部隊)

年月日

略

歴

昭和一八 五 一

第二十六師団工兵隊編成(豊橋)

爾後主力、北支大同に、一部包頭、厚和等に駐屯

一九 七

南方派遣のため駐屯地出発

七 二二

満支国境通過

八 五

釜山港出帆

八 二四

ルソン島マニラ上陸同島の警備

一〇

マニラ出発

一一 三

主力はレイテ島オルモック上陸

一二 一七

一部はセブ島に上陸同島の警備に任じ終戦に至る
部隊アルペラに集結の後ブラウエン攻撃作戦に任ず

一三

タリサヤン転進中ルビ東方地区に降下した米軍空艇隊とブラウエン、ダガミ方面よりの三方攻撃を受け激戦を展開した

自一九 至二〇	二二 二二	二六 二二	八	一五	九	二
ブラウエン西方十軒の戦闘に於て玉砕す						
停戦						
終戦						
(注) 少数の生存者は米軍の收容所に收容され終戦後各個に復員する						

0010

0200

年 月 日	略 歴
昭和二 九 三〇	軍令により独立歩兵第十一連隊（津、東海59部隊）編成完結
一九 二	爾後蒙疆大同を中心として判界、左雲、鎮周辺に駐留
一九 七	句頭周辺に移動同地附近の警備に任ず
一九 八 二	南方派遣のため句頭出発部隊は各挺隊に分れ釜山に集結関東軍の機械化部隊と共に輸送船に分乗
一九 八 二二	釜山港出帆
一九 八 二二	比島マニラ上陸、第二大隊は基隆、高雄等に寄港十月初旬ルソン島サンフェルナン ドに上陸
一九 九 二	連隊本部、第一大隊、通信隊、速射砲隊、マニラ上陸 第二大隊は陸路南進して揚陸作業等に従事す。 連隊本部、第一大隊、第三大隊はマニラ上陸後ルソン島中部のデインガラ湾及びベ

昭和二〇	一	二	二	二 下旬	二〇 三 下旬	五 二〇	六 二二	七 一	九 二
<p>レル湾の陣地構築を命ぜられバナツアン、タブランに前進</p>	<p>米軍のリンガエン湾攻撃が始まり部隊は軍令により北部ルソン山岳地帯に移動を開始す</p>	<p>リサール、パンタパンガン、カラングランに至る</p>	<p>藤里混成大隊はサラクサ方面守備を命ぜられブンカン、サントフェ道路上を転進サラクサ地区に入るも、ブンカン附近に於て米軍と遭遇交戦多数の死傷者を出した</p>	<p>鈴鹿峠附近陣地を占領</p>	<p>米軍は一ヶ師団の兵力を集中優勢なる機械化部隊を以つて攻撃し来るも克くその陣地を確保し又果敢なる陣地斬込を敢行しパレテ方面の戦斗を容易ならしむ</p>	<p>連隊主力はサントフェ東側に転進して陣地を占領せるも引続き米軍の攻撃を受く</p>	<p>砲撃は益々盛んにして米軍は鈴鹿谷三叉路に入るも鈴鹿峠は確保中</p>	<p>軍命令により転進を開始す</p>	<p>以後各隊は次の二道を通りピナパンガに向う</p>
<p>(1) 一五二四高地北側から川沿いに転進七月末カカヤン河支流のデドヨン河流部落に達す途中約千米の連山密林地帯を踏破す</p>									
<p>(2) 山中をビルク、トーン等イゴロット族部落を経て八月中旬ピナパンガンに達す</p>									
<p>終戦</p>									
<p>(注) 終戦後米軍の收容所に入ると同時解隊させられ爾後各個に復員する</p>									

		独立歩兵第十二連隊 (泉第五三一五部隊)	
年	月	日	略歴
昭和二二	九	三〇	独立歩兵第十二連隊編成(岐阜) 爾後北支大同に駐屯
一九	七	一一	編成改正完結
	七	一九	南方派遣のため駐屯地大同出発
	七	二四	満支国境通過
	八	八	釜山港出発
	八	二五	比島マニラ上陸
	一〇	二七	マニラ出発
	一一	三	レイテ島オルモック上陸
二三	八		オルモック附近の戦闘に参加

昭和	一三	一四	アルペラ附近の戦斗に参加
一〇	一	一五	ナクアン山附近において師団主力と併合シラット方面に転進を開始
自〇	四	五	カルブコス
至〇	七	三	の戦斗に於て部隊は全滅す
二〇	八	一五	停戦
	九	二	終戦

(注) 少数の生存者は停戦後武装を解除され米軍の收容所に收容され終戦後各個に復員する

独立歩兵第十三連隊（泉第五三一六部隊）

年 月 日	略 歴
昭和二二 九 三〇	独立歩兵第十三連隊静岡に於て編成 爾後北支厚和に駐屯
一九 七 二二	編成改正完結
七 二二	駐屯地出発
七 二六	満支国境通過
八 四	釜山出発
八 一九	パシ―海峡において魚雷攻撃を受け玉津丸（本部第二大隊）海没せり
八 二四	主力比島マニラに上陸
一一 八	マニラ出発
一一 二二	レイテ島オルモック上陸
	一部はマスベテ島南部に於て爆撃を受け海没、遭難残存者はセブ島に上陸

昭和 自一九 至〃	一一 一二 一三 一六 一七	一〇 八 一五	九 二	爾後同島の警備に任ず	主力をアルベラに集結	ブラウエン西方十軒地点に於ける戦斗に参加	この戦闘において有力なる米軍の三方攻撃を受け部隊は玉砕す	停戦	終戦	(注) 生存者は米軍の収容所に入ると同時に解隊させられ、爾後各個に復員する
-----------------	----------------------------	---------------	--------	------------	------------	----------------------	------------------------------	----	----	---------------------------------------

6080

0206

第二十六師団通信隊 (泉第五三二〇部隊)

年	月	日	略	歴
昭和二二	九	三〇	第二十六師団通信隊編成(名古屋)	爾後北支大同に駐屯
一九	七	一一	編成改正完結	
	七	二三	駐屯地出發	
	七	二七	滿支国境通過	
	八	五	主力釜山港出發	
	八	二三	比島ルソン島マニラ上陸	
	一〇		マニラ出發	
	一一	三	レイテ島オルモック上陸	
	一二	三	兵団主力タリサヤンに集結	
二〇	一	三	同地出發	

昭和二〇 一 一五

ナクアン山ダナオ湖ルビー附近の戦闘に於てパロンポンに上陸せる米軍の攻撃を受け主力は玉砕

二〇 七 三

残余者はシラット、カルブコス、転進中米軍の攻撃を受け玉砕す

(注) 少数の生存者は米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

第二十六師団野戦病院 (泉第五三二四部隊)

年 月 日	略 歴
昭和二三 八 二四	第二十六師団野戦病院編成(名古屋) 爾後北支大同に駐屯
一九 七 二一	編成改正完結(大同)
七 二 二二	南方派遣のため大同出発
七 二 二七	満支国境通過
八 五	釜山港出発
八 二 三二	比島ルソン島マニラ上陸
一〇	マニラ出発
一一 三	レイテ島オルモック上陸
一一 八	レイテ島に向う途中一部海没ルソン島バタンガスに上陸し爾後第一三八兵站病院、戦車第二師団患者收容隊に編入されルソン島に於て作戦に参加 主力はアルベラに転進患者收容に従事

昭和

二〇

一三
二五

一
三

八
一五

九
二

タリサン東方地区に集結

米軍の攻撃により患者と共に玉砕す

停戦

終戦

(注) 生存者は米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

第二十六師団病馬廠（泉第五三二六部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一三 六 二二	第二十六師団病馬廠編成（名古屋） 爾後北支大同に駐屯
一九 七 二一	編成改正完結（大同）
七 二二	南方派遣のため大同出發
七 二七	滿支国境通過
八 五	釜山港出發
八 二二	比島ルソン島マニラ上陸
一 一 八	マニラ出發レイテに向い途中十一月十日米軍機の空襲を受け火災を生ずるも全員海軍艦艇の救助を受けマニラに引返す
一 一 二五	再びマニラ出發レイテに向い
一 一 二八	オルモックに上陸
一 一 二九	イビルに前進を開始

外
四

昭和一九 二〇	アルペラ戦闘に参加 シラットに向い転進
一一 一二	米軍の猛攻撃によりシラット附近において玉砕す
一三 一四	終戦
一五 一六	終戦
一七 一八	終戦
一九 二〇	終戦
二一 二二	終戦
二三 二四	終戦
二五 二六	終戦
二七 二八	終戦
二九 三〇	終戦
三一 三二	終戦
三三 三四	終戦
三五 三六	終戦
三七 三八	終戦
三九 四〇	終戦

(注) 少数の生存者は米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

輜重兵第二十六連隊 (泉第五三二一部隊)

年 月 日	略 歴
昭和二三 九 三〇	輜重兵第二十六連隊編成(名古屋)
一九 七 二一	爾後北支、大同に駐屯 編成改正完結
七 二 三	駐屯地大同出發
七 二 七	滿支国境通過
八 五	釜山港出發
八 二 三	比島ルソン島マニラ上陸
一一 八	マニラ港出帆
一一 二 二	レイテ島オルモック上陸
	第一中隊はレイテに向い航行中海没マニラに返転、中隊主力はルソン島で作戦し、 第一小隊はレイテに追及す。

自一九二〇	自一九二〇	自一九二〇	自一九二〇
至一九二〇	至一九二〇	至一九二〇	至一九二〇
九	八	一	二
二	五	三	〇
終戦	停戦	ブラウエン附近の戦斗に参加	オルモック、アルペラ間の資材輸送並に患者護送に従事中、イビルに上陸せる米軍と交戦す
<p>(注) 生存者は米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する</p>			

独立野砲兵第十一連隊 (泉第五三一八部隊)

昭和二	年	月	日	略	歴
一九	七	七	七	南方派遣のため駐屯地出発	
		八	七	満支国境通過	
			二	釜山港出帆	
			二	比島ルソン島マニラ上陸	
			三	マニラ出発	
		一	三	師団主力と共にオルモックに上陸	
		二	二	約一個大隊の兵力は上陸時砲爆撃のためマニラに後退、マニラに上陸	
		三	二	アルベラ附近の戦闘に参加	
		一	二	シラットに集結	
		三	〇	シラットに於ける米軍の猛攻撃に対し最後の突撃を敢行し全員玉砕す	

昭和二〇

八
一五
九二
終

停戦

(注) 少数の生存者は米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

第二十六師団兵器勤務隊 (泉第五三二二部隊)

年 月 日 略 歴

昭和二三 八 二四 第二十六師団兵器勤務隊編成

爾後北支大同に駐屯

一九 七 二一 編成改正完結(大同)

七 二二 南方派遣のため大同出発

七 二七 満支国境通過

八 五 釜山港出発

八 二二 比島ルソン島マニラ上陸

一〇 二七 マニラ出発

一一 三 レイテ島オルモック上陸

一二 二五 イピルを経てタリヤサンに転進

二〇 一 三 米軍の包囲を突破しタリヤサン出発

昭和二〇	一	二〇	パレンシヤ飛行場の戦闘に参加
	三	三〇	シラット附近の戦闘に於て米軍の猛攻により最後の突撃を敢行し全員玉砕す
二〇	八	一五	停戦
	九	二	終戦

(注) 生存者は米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

年 月 日	略 歴
昭和一九 六 六 一 五	軍令により独立自動車第三一九中隊動員下令 編成完結（千葉）
六 三 〇	千葉出発
七 三	下関港出帆
七 一 九	比島ルソン島マニラ上陸
二〇 一 初旬	以後マニラに在りて第四飛行師団長の指揮に属し主としてマニラ附近の局地輸送並にクラークフィールド、リバ等の各地飛行場間の輸送業務に従事 イサペラ州サンチャゴに移駐を開始す 爾後サンチャゴに於て前線への糧秣輸送に従事
六 一 五	サンチャゴ出発ブンヒヤン、マヨヤオに向い転進
八 五	マヨヤオ出発
八 一 〇	パストルに転進

昭和
二〇

八
二五

山岳州リヤスに転進

九
二
終 戦

九
六
ポンドツクに於て武装解除のうえ米軍収容所に収容さる

爾後各個に復員する

第十四方面軍松野大隊

(威)

年 月 日	略 歴
昭和一九 一 一〇	軍令により第十四方面教育隊編成完結(比島ルソン島ストツチエンバー)
一一 二〇	マニラ北方イボ附近に集結
一二 八	第十四方面軍教育隊より分離同日第十四方面松野大隊編成完結
二〇 一 二〇	北部ルソン島転戦のためイボ出発
二 二〇	第十師団指揮下の高千穂空挺部隊長の指揮下に入りバギオ東方の警備及びパレテ峠附近の戦闘に参加
八 一五	停戦
九 一七	北部ルソン島ヨネスに於て武装解除
一〇	パタンガスに集結米軍の収容所に入る
	爾後各個に復員する

特設第五十一機関砲隊 (旭第一二四四八部隊)

年	月	日	略	歴
昭和一九	八	一〇	軍令陸甲第一百十号に拠り特設第五十一機関砲隊臨時編成下令	
	八	二三	編成完結(舞鶴)	
	九	二	舞鶴出発	
	九	一〇	門司港出帆	
	一〇	六	比島ルソン島北サンフェルナンド上陸	
			爾後北サンフェルナンド要地防空に参加	
	一〇	一〇	バギオ市防衛司令官の隷下に入る	
			爾後バギオ市附近の防空戦闘に参加	
	八	一五	停戦	
	九	二	終戦	
	一二	二五	内地帰還のためマニラ港出帆	

	三	浦賀港上陸
	一	
	三	復員

(注) 爾後各個に復員する

独立混成第六十一旅団工兵隊 (鎧第一〇二九八)

年	月	日	略	歴
昭和一九	六	七	一七	軍令により独立混成第六十一旅団工兵隊編成下令 編成完結(京都)
	七	下旬		広島港出帆
	八	上旬		台湾高雄上陸
	八	中旬		高雄港出帆
	八	中旬		比島バタン島上陸第十四方面軍の司令官の隷下に入る以後バタン島警備に従事
	八	一五		停戦
	九	二		終戦
	二二	一〇		終戦後マニラ附近に抑留さる
	二二	一〇		内地帰還のためマニラ港出帆
	二二	一五		名古屋港上陸
	二二	一六		復員完結

鉄道第八連隊

(尚武第2144)

年 月 日	略 歴
昭和一九 二	軍令により鉄道第八連隊編成下令
三 三	編成完結(千葉)
三 中旬	第二大隊門司港出帆
四 中旬	昭南上陸以後仏印に転進サイゴン及サントリーに於て鉄道橋修理に従事
四 五	部隊主力及び第一大隊、門司港出帆
五 五	昭南上陸
五 中旬	部隊主力はサイゴンに転進
八	第一大隊はスマトラ島に転進、中部スマトラ横断鉄道建設作業に従事 比島転進のため部隊を昭南に集結す
一〇	(第三中隊主力はサイゴンに残留同地鉄道司令部に配属) 昭南港出発

昭和	一一	五	比島マニラ港上陸
二〇	八	一五	満州より転用の補充員（五四二名）を編入各隊に配属する 爾後ルソン島の鉄道輸送業務並に戦闘に参加
九	二	終	戦
（注）終戦後米軍の収容所に入ると同時に解隊させられ爾後各個に復員する			

独立歩兵第三五九大隊 (勤第一〇六七二部隊)

年	月	日	略	歴
昭和一九	五	五		軍令により独立混成第三三旅団臨時編成完結(富山)
一九	五	二四		富山出発
	五	二八		門司港出帆
	六	八		比島マニラ上陸、タヤバス州ルセナに駐留
	七	一〇		編成改正により第一〇五師団独立歩兵第三五九大隊となる
	七	一六		大隊はバタンガス防衛を命ぜらる(本部、第四中隊は、バタンガス、第二中隊はミンドロ島、銃砲隊はバタンガス州タナワンを夫々警備)之より先第一中隊は師団直轄となりサンタクルスに第三中隊はマニラ防衛隊司令官の指揮下に入りカランバ附近の警備に任ず
	七	一八		新に臨時第一中隊、第二中隊を編成し、ミンドロ島の警備に従事
一九	一〇			部隊はサンホセ、ブラ、カオ、バルアンに分散配置し西海岸、東海岸の警備に当る、サンホセに上陸し同地に航空基地を設定せる米軍を遮撃し相当数の損害を蒙る東海岸においては匪賊(ゲリラ)の跳梁殊に甚しく中央山地に拠り抗戦せるも食糧の不足と悪性マラリヤの発生とにより多数の消耗を生ぜり

昭和	八	一五	大隊はマニラ防衛隊長の指揮下に入る
	九	中旬	師団命令によりルセナ東方マリクボイに移動ケソン峠附近の陣地構築に従事
	一〇	一	カバナツアン附近において米軍と交戦多大の損害を被る
	一〇	三	更に(三月―四月)バリテ峠附近にて米戦車群と激斗
	五		五月―六月キャンガンにおける戦斗にて殆んど全滅に近き損害を受けた。
	一〇	八	第三中隊は第二中隊と共にマニラ防衛司令官の指揮下であり、ブラカン州ブラリ
		一五	デル附近の警備に従事していたが米軍リンガエン方面より攻撃し来りたるため小
	九	二	林兵団長の指揮下に入りマロロス東方山地にありて米軍と屢々交戦レイボ、ラオタン
			附近にて殆んど潰滅状態となる
			停戦
			終戦
			終戦後生存者は米軍収容所に収容され爾後逐次復員